

芥川賞全集

第二卷



文藝春秋

芥川賞全集 第二卷

著者

火野葦平
中山義秀
中里恒子
長谷健
半田義之
寒川光太郎

昭和五十七年三月二十五日 第一刷
昭和五十七年三月三十日 第二刷

定価

一八〇〇円

発行者

杉村友一

発行所

株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(〇三)二六五一二二一

本文印刷

理想社印刷所

付物印刷

凸版印刷

製本所

中島製本

製函所

加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

目次

糞尿譚

火野葦平 5

厚物咲

中山義秀 57

乗合馬車

中里恒子 83

日光室

あさくさの子供

長谷健 139

鶏騒動

半田義之 279

密猟者

寒川光太郎 317

選評

345

受賞者のことば

421

年譜

427

題 裝

字 丁

中 栗

田 屋

功 充

芥川賞全集

第二卷

糞
尿
譚

火
野
葦
平

（第六回 昭和十二年下半期）

「現代日本文學大系 第七十五卷 石川達三・火野葦平集」(昭和四十七年十一月発行、昭和五十五年十月初版第十一刷、筑摩書房刊)を
底本とした。

どこかでは既に雨が降っているのか、白く光って見あげるようにむくむくともりあがった入道雲の方向で、かすかな遠雷のとどろきがして居る。斜面を下りながら、彦太郎は、麦藁帽子の縁に手をかけて空を見あげ、一雨来るかも知れんと思い、灼けるように陽炎をあげている周囲を見わたすと、心なしか、さつと、一陣の冷たい風が来て西瓜畑の葉を鳴らした。緒土の中ころがった大小さまさまの西瓜は埃にまみれて禿げたように青い色を晒している。下りながら、両手で輪をつくり、口にあてて、おうい、と叫ぶと、小さく下に見える池の中央に入って、真裸で両手を水中につっこんでいた男が、顔をあげた。彦太郎だと知ると、下の方で背をのびし、のびをして腰をたたき、こちらに笑いかけたのが遠目にもわかった。土埃をたてて斜面を駆け

下ると、情力で危く池の中に飛びこみそうになったが、岸にある無花果の樹にようやくつかまった。顔見合わせ大声たてて笑った。卯平さん、あんた、なにしろか、と彦太郎はもう草の上に坐りこんで腰から鉈豆煙管をとりだし、雁首にきざみをつめながら訊いた。びしょ濡れになった上に額から汗が流れおちて眼に入るのを、卯平は泥だらけの手で拭くわけに行かず、腕でするつとなでて、食用蛙を捕えてやろうと思っているのだが、なかなか見つからないので、仕方がないから池を干そうと思つて泥吐口を抜きよつたところだと云つた。食用蛙が居るのか、と彦太郎はびっくりした顔で訊きかえた。どうも四五日前から妙な声で鳴く奴がある、確かに食用蛙に違いないと思つて探し廻ったがさっぱりわからんのだ、池の底に隠れているに違いないと思つて掻き廻してみても出て来ん、がまの穂を餌にして釣りかかってみたが食いつかん、夜中になると嫌な声を出して鳴きやがる、がぁおん、がぁおん、というような赤子のような声で、女房はあんな具合だし、癪にさわつてさっぱり寝つかれん、仕方がないから、こんな小さな池だし、干してやれと思つて、先刻泥吐口を抜こうと思つて池の中に入つたんだが、口が緒土を咬こんでいるのか、なかなか栓が動かんで骨折つたところだ、どうしても捕えに

や腹が癒えん、と話しながら、卯平はまた両手を赤く濁った水の中につこみ、息を吸いこんで顔をしかめたと見る間に、水煙をあげて池の中に沈んでしまった。しばらくぶくぶくと泡が立っているのを彦太郎はじつと見つめながら、卯平がなかなか上つて来ないので少し不安になりはじめたが、すると、今まで騒いでいた水面が、波紋をおさめじつと動かなくなった。彦太郎は急に胸がどきどきしだし、何かに引つかかって上れなくなったと思い、入って助ける気になってシャツを脱いだ。股引のバンドに手をかけた時、突然池の中でがぼうという大きな音がし、ごうという音といっしょに吸いつけられる勢で水が布を裂くように鳴る音が聞え、水面が渦巻ぎだしたまんにばかりと卯平の顔が出た。ぶるぶると頭を振り、かあと唾をはき、くそう、えらい骨を折らしやがった、と云って、右手に持っていた栓を岸の草の上に投げて、きょんと立っていた彦太郎の顔を見て、声を立てて笑った。土堤の下の方で水の抜けるはげしい音が聞え、眼に見えて水面が下りはじめた。まるで河童じゃな、あんた、と彦太郎が云うのに答えず、卯平は鋭い目附になって注意深く池の中をあちこちと眺め廻した。脱いだシャツをまた着なおして、彦太郎も岸辺の叢などに眼をやった。水すましがあわてたように水面を舞ったり、

小さな青蛙が飛んだり、爪の赤い蟹が倉皇として逃げたりしたが、食用蛙の姿は見えなかった。居らんぞ、あんた、と彦太郎が投げだしたように云うのに、卯平は何にもいわず、じつと池の面から眼をはさなかった。彦太郎は退屈して又草の上に腰を下したが、何気なしに横を見上げた途端、彼は飛び上らんばかりに驚いた。一間とは離れていない小屋の窓に、髪をさんばらに顔にたらし、ぎろぎろと大きな眼を見ひらいて彼を睨みつけている白衣の女の姿があった。彦太郎は我にもなく驚愕した自分がてれ臭くなったので、卯平に声をかけ、ごりょんさんはまださっぱりせんらしいな、と云った。卯平はようやく水面から眼を離して、窓から身体をのしだして、泣くとも怒ったともつかぬ、くずれたような表情をたたえ、日頃から大きい眼が、痩せ細ったために、飛び出したように見える瞳をすえて、齒をかむような声を立てて笑いだした女房に、いきなり擲んでいた泥を投げつけ、ちょうッ、と動物を追うように怒鳴り、坐っておれ、と叫び何か大きな声でお経のような文句を云った。馬鹿、馬鹿、と女房は急に勢が抜けたように肩をすぼめ、引っこんで、暗い土間に坐りこんだらしかった。困ったもんだ、と卯平の精悍な顔にちらと悲しげな影がすぎたが、すぐにもとの元気な顔になって、執念深い狐だ、今

日で十日になるのにまだ出て行かん、戸まどいして女房に憑いたりなどして阿呆狐めが、はがゆうてならん、その裏の稲荷の狐らしい、暴れて仕方がないので呪禁して貰ったらいくらおとなしくなった、何とも知らんことを口走ったり、何でも手あたり次第に投げたり、暴れるので危いから、山の総円さんに来て貰って、紙振で封じて貰った、総円さんは飲んだくれのやくざ山伏と人はいうけれども、俺はつくづくと今度だけはえらいと思つた、あまり暴れるので俺が大きな綱でぐるぐるまきに縛つておいたのに、どんなに頑丈にしても何時の間にか抜けてしまうのだ、ところが総円さんは短いかんじんよりで手足の指を繋いで押んだだけだが、それでもう自由がきかず、全くおとなしくなつた、二三日中には必ず狐を追い出してやると総円さんも云っているから、間もなく癒るだらう、ただ何にも食べないので、瘦せてゆく一方で、それを見るのが可哀そうだ、と次第に卯平は声を落したが、急に氣をとりなおすように、嬢も因果な奴さ、おれが道楽して居る間中苦勞をさせて、とうとう赤瀬の親方にひどい迷惑をかけて、お詫びかたがたこの山の番人みたいになつたが、百姓仕事ばかりさせて碌な目にも合わせず、揚句にや狐にまで取憑かれましたやがった。そう云つて卯平はおかしそうに笑つた。自嘲す

るようなその笑いは妙に空虚で、そのうそ寒い哄笑は、いきなりがんと彦太郎の胸をたたいた。彦太郎は眼を外らし、急にそわそわと落ちつかぬ風で、草の上から腰を上げると、まあ、ごりょんさんを大事にな、あんた、と云い捨てて、逃げるように緒土の斜面を駆け上つて行つた。どしたかな彦さんと卯平が腑に落ちかねて、もう少し居たら池も干上つてしまふぜ、食用蛙が捕つたら、つけ焼にでもして久しぶりに一杯やろうではないかと、卯平が後から声をかけたのが、最後の方は遠くなった耳にもう聞えなかつた。西瓜畑の間を駆け抜けて、道路に出ると、彼は慌てて待たせてあつた貨物自動車の運転台に飛び乗つた。運転手の沢田に急いで行くように命じ、トラックが動きだすと、ようやく安心したように坂の下を見た。卯平の姿が池の中に豆粒のように見えた。卯平は腹這いになつたような恰好をして何かを押えつけているらしく見えたのは、或いはどうとう食用蛙を見つけたのかとも知れないと彦太郎は考えたが、それより彼は可哀そうな卯平の女房の居た部屋の間が氣になつて、くねくねと曲折する道路のため、見えたり隠れたりするのを、努力して探したが、もう白衣の女の姿は見えなかつた。トラックは開墾地の間を縫っている曲折の多い山道を濔々たる土煙をあげたよと走つた。この辺は

佐原山の頂上であつて、数年前までは笹や灌木などの密生した全くの荒蕪地であつたのである。竹の根が深く土中を縫っているために開墾には不適當とされていたのであつたが、先年この地方に防空演習が行われた際、この佐原山の絶頂に高射砲陣地を作ることとなり、登山路としては幅三尺にも足りぬ道しかなかったため、工兵隊が来て数日の間に幅二間を越える立派な登山道を作った。演習が終つた翌年、上海事変が勃発したが、廟行鎮攻撃の際に戦死した肉弾三勇士は、その時の道路開墾工事に従事して居つたのであつて、佐原山の頂上には立派なる三勇士の記念碑もある。この登山道の開通はこの市にとつてはまことに感謝すべきことであつた。この道の開通を契機として、佐原山は公園化し、この山を中心として各方面に出る新道路が縦横に開設され、従つて道路を中心として、荒蕪地として放任されていた山頂の市有地がどんどん開墾されはじめ、現在では、どの丘も、どの斜面も畠が連なり、果樹が栽培され、年々相当の收穫を挙げる農作地となつたのである。ここからはまともに蒼茫たる玄海灘を望むことが出来る。幾つかの島を浮べたこの荒海は、雲と船と海鳥とをあしらつて絵のごとく美しい。それ故に直接塩をふくんだ潮風を受けるために多少の風害はあるとしても、農民達の撓まざる努力

に依つて、年々、大根、芋、葱などの野菜類はもとより、無花果、枇杷、梨、西瓜などの果物類も豊富にとれるようになったのである。これらの畠のある斜面につけられた道路を、彦太郎のトラックは疾走してゆくのである。トラックに積んだ肥料桶がごととぶつつかつて鳴っている。二十荷のうち半分は空であるが、半分はつまっているのだ、たばたと時折り音がする。彦太郎が卯平の所に寄つたのも、四荷ほど肥料を廻してくれるようにと頼まれていたからであつたのに、商売も忘れてしまつて彦太郎は逃げだしてゆくのである。嬬も因果な奴さ、と卯平の云つた言葉がぴんと胸にひびき、彼は、苦勞させつづけている自分の女房と子供達のことを思い出し、今更のことではないけれども、日頃鼻柱の強い卯平が何時になくしんみりと述懐した様子が、やきがねのごとく彼の心をはじいたのである。今日で三月近くも彼は家に帰らない。三月前に帰つた時も、村の方に肥料を売りに行った序に立ち寄つただけで、壊れた竹垣の戸をあけて入つて行くと、女房のとしのは畠で草をむしっていたが、彼の姿を見ても表情を変えず、畠の横を通り過ぎて家の方へ行く彦太郎の背後から、顔も上げずに、無尽会社が来とつたですよ、と一言云つたきり、のろくさい手附でしきりと草をむしりつづけていた。緒ら顔を

手でこすり、彼は家の前に立ちはだかつて、くすぶった軒土のはげた壁をひとわたり見わたし、字の見えなくなった表札を凝視して、今に見て居れ、今に見ておれ、と呪文のごとく呟いた。坂田村の豪農として何代も続いた小森家は彦太郎の代になって壊滅に瀕して居る。鬱勃たる事業慾を押えることが出来ず、彼は山林の一部を抵当にして信用組合から資本の融通を受け、糞尿汲取事業を開始した、従来は百姓達が馬車を曳いて市の方に出て行き、市内糞尿の汲取をして居たが、自分達に肥料の必要でない時には中止する。市内に何人か居る商売人も全部馬車か牛車であつて能率は捗々しくない。彼は桶二十荷を積めるトラックを一台購入した。汲取賃、及び肥料として農村へ売り捌く収益とを合算し、近代的方法に依つて市民の大半を得意に取り得るは必定であつて、必要諸経費を差引いても、相当の剰余金のあることは確実である。彼は意気揚々として、周囲の人々の冷笑の中に開業した。ところが始めてみると、彼の算盤は片端から違算にぶつかった。第一、営業の許可問題でごたごたした。市中にはトラックを何処にも入れることの出来ないために、桶用リヤカアを作り、汲取った桶を一定の場所に集めておいて、トラックを廻して積み込む外なく、一カ所ではトラックにしたことが用を為さないため、

リヤカアも二つ作り、桶も八十荷作り、汲取人夫は六人もよけい雇い入れた。其の外、色々の事業の面倒な経緯は省略するとして、彼が商売をはじめてから十年間に、先祖から残されて来た山林田畑はもとより、家屋敷まで悉く人手にわたり、あるものとしては、ただ、今に見て居れ、という彦太郎の執念ばかりとなつた。トラックも幾度か抵当に入り、幾度か差押えの厄に遭つた。彼がひたすら失敗と没落の道をたどつて行つたのには、他の重要な原因として、彼がなかなかの酒ずきであつたことがひとつ、もう一つには、この地方が非常に政治的にうるさいところで、政党政派の関係があらゆる商売取引に浸潤し、政党への顧慮なくしてはいかなる商売も成立しなかつたことが、ひとつである。彼は村にも家にも帰らなくなつた。帰れなくなつたことが本当かも知れない。海浜に近い野原の片隅にトラックを入れるバラック小屋を建て、その横に四畳半の一部屋をこしらえて其処に起き臥し、不自由な自炊をした。初めはがみがみと叱言を云い、中頃には愚痴をこぼしていた女房も、この頃ではなんにも云わなくなつた。村に肥料を売りに出かける時折に、家に立ち寄つてみるのであるが、何時行つても女房のとしのは畠に出ているか、薬を打っているか、機を織っているかして働いていた。十二になる徳次と、八

つになって今年から学校に行くことになった千代子とは父が居なくとも元気に大きくなった。心からの親しみを見せない子供を淋しく思つたけれども、今に、ゆつくりと一緒に暮すことになる日があると思ひ、その時こそ心ゆくまで楽しい生活が味えると思つた。村の誰彼が彼を目して、低能といい、阿呆といい、お人よしといい、まったく馬鹿のひとつおぼえ、「長久命の長助」だと、嘲笑して居ることも知つて居る。今に見て居れ、という言葉は彼の宗教のごとくになった。工兵隊の作つた山道をトラックは古びた体軀をがたつかせながら、下りはじめた。警戒しながら速力をゆるめると、急にさあと冷たい風が横から頬をうつたので、我にかへつたように彦太郎が見あげると、亭々と聳える杉林の上は、何時の間にか、いっばいの黒雲に掩われてのしかかるように暗く、同じように顔をあげた運転手と眼を見合わせ、瓢箪のような顔の沢田が、眉をひそめて口を尖らせたが、ぼつりと、頬にひとつ、来たという沢田の聲に命令されたように、さあと大粒の雨が一斉にまっ白く降りだした。石臼をひくように遠くから起つて来た雷が、いきなり頭のま上で恐しい音を立て、杉林にひとしきりはげしい雨の音をたたきつけた。赭土の道に豆粒をまくように穴をあけてつきささるはげしい雨脚をながめながら、彦太郎は、

ひょっくり、吃りの天野久太郎のことを思いだし、今夜は是非天野を説得して組合のことを協議しなければならぬ、と思つた。

朝早く、車体検査のため、沢田がトラックを運転して出た後、彦太郎は油で汚れた手を洗濯石鹼で洗つて、檻に腰を下すと、昨夜残しておいた焼酎のあつたのを思いだし、細目の金網の張つたみずやの中から一升徳利を取りだした。栓をとつて覗いてみると、半分程あるらしいので、彼は人の好きそうな笑いを浮べ、湯呑茶碗について、ごくんごくんと飲んだ。咽喉を透る痺れるような氣持をたしなむように眼をつぶり、右手で胸を押え、しばらくじっとしていた。食道をすぎて胃袋に入つてゆくのがはつきりわかり、精氣がついたように身体中が膨れて来るのを感じた。これで今日も一日元氣で働けると思ひ、彼の苦難に満ちた四十五年の生涯が、この一杯の焼酎の中に溶けこんでしまつたような、洋々とした氣持になった。三杯ほど引つかけ、立ち上ると、集金帳を下げて表に出た。ぎらぎらと光る砂が彼の眼を射すくめたが、陽炎のあがるその砂丘の向うに、幻燈のようにまっ青な海が横たわり、防波堤に白い飛沫をあげて、だうんだうんと鳴っていた。彼は大きな欠伸をして、トラック小屋の上に近頃塗りかえて揚げた新しい看板を振

り仰いだ。

市指定取人
衛生 舍
電話八六九番

純白なペンキの色が一層彦太郎を楽しくした。今度入れた市指定の三字を何度もうりかえして眺め、よしよしという風にもったいらしくうなずいた。それからトラック小屋の裏手に廻ると、大きな声で、よい、居るか、と呼んだ。はい、と掘立小屋の中から鈍重な返事が聞え、赤錆びたトタンの扉をめくって、長髯をしごきながら、ひよろ長い李聖^{りせい}学の顔が出た。これから集金に廻るが従いて来んかと彦太郎がいうと、急に顔を曇^{くも}めて、どうも昨夜から腹が痛いですから、と云い、返事も待たず、馬鹿にしたような薄笑いを浮べて、がたとトタンの扉を下してしまった。彦太郎が舌打して、早魃^{かんばつ}で水量の減った唐人川に沿うて下って行くと、背中に、掘立小屋の中で、妙な節廻しで李聖学が朝鮮の歌をどなっている声が聞えた。その間ののびた

歌声は明らかに彦太郎を嘲弄^{ちょうろう}した調子を帯びていたけれども、彦太郎は一向通じない様子で、自分も釣られたように、口三味線を入れながら、三勝半七酒屋^{さんかつはんしちや}之段のくんだりか何かを口吟^{くぎん}みだした。この浮かれた気分は彼にとつて彼を実に幸運な事態にみちびいた出来事が起った。彼がしまいは手で調子をとりながら唐人川の最下流にかかっている土橋をわたりかけた時である。いったいこの幅一間に足りない小川はこの市にある唯一の溪流で、佐原山の裏手に連なる笹倉山の奥に源を発しているのであるが、昔、明治初年頃滔々として文明開化の流れがこの一寒村にも沁みわたつて来た時、この附近にコークス工場が出来、一人の仏蘭西^{フランス}人が技師としてその頃の人達が眼を廻したほど高い給金で雇われて来たが、その外国人がこの小川に砂金が採れるなど云いだし、一時非常に騒がれたことがあった。その為に全くの海浜であったこの小川の下流にたちまち部落が出来てしまったほどである。そのため昔はこの川には別の名があったのであろうが、何時の頃からか唐人川と呼ばれるようになったのである。明治初年頃には二百戸に満たない一漁村であったこの市は、鉄道の開通、築港の完成、石炭の採掘積出し、等によって急速に進展したのであるが、この唐人川の下流に砂金の宣伝によって出現した部落は、この

發展の中心から全く置き忘られたように、昔のままの姿であつた。コークス工場も何時の間にか無くなり、その外国人も何処に行つたやら消えてしまつたが、ここに残つた一劃の部落は、その後町の發展の圏外にありながら、一つの任務を帯びるようになった。このドノゴオ・トンカは、金を採るかわりに塵芥を取る部落となつた。村は海岸に望んで五十戸程密集し、背後の丘の上には赤煉瓦の市立塵芥焼却場があつて、百七十尺の高い煙突が聳えて薄黒い煙をはいている。海浜や道傍の到處に塵埃の山があり、馬車が何台も道につながれてあつて、足の太い馬が毛の抜けた鬣をふつて懶そうに嘶いている。彦太郎が唐人川の土橋に足をかけた途端、それらの塵芥の山の一つに立っていた三人の紳天姿の男が、ほれ見、糞男が行くぞ、生意氣な奴だ、この頃、俺たちの仕事の邪魔をしようとして居やがる、とか何とか、がやがやと話しだしたと見る間に、腰をかがめて、塵芥の山から、ブリキ鍮や、釘の折れや、竹切などを拾つて、塵の礫を飛ばしだした。刺のあるこれらの手榴弾は雨霰と彦太郎の背後に落下したけれども、そのけたたましい音を耳にしながらも、彦太郎はそれが自分を襲ふ敵弾だと考え及ぶには、幸いにもあまりによい機嫌になり過ぎていたのである。鐘詰の殻が彼の右足に命中した

にもかかわらず、彼は振りむこうともせず、今ごろは半七さん、どこにどうしてござろうぞ、と、一層調子を高めながら、悠揚せまらず、橋をわたり、町の方へ出て行つた。

集金帳を繰りながら、彼はあちこちの家に立ち寄つた。

大黒様のついた黄色い財布は次第に錢で彫れて行つたが、彼は次第に先刻からの氣分を失いはじめて、だんだん憂鬱になつてゐた。一カ月勘定になつてゐるので、僅かな汲取料金であるし、歩きさえすれば、すぐにでも集金は済みそうなものであつたが、實際はそうではなかつた。三べんも四へんも足を運ばせ、誰が居ないから判らないとか、今日は都合が悪いとか云つた揚句、ようやく五度目位に、やつとくれるような家は何軒もあつた。先月までは家族五人だつたが、娘が一人このほど嫁に行つたから、十錢だけ引いてくれ、などといい、引かなければ他の汲取人に頼むからとすぐ云うので、仕方なしに割引したりする家も何軒かあつた。汲取り方が悪くて不潔で仕方がない、あんな取り方をするなら金を払わぬ、と叱言を云い、今後注意しますからと平身低頭して陳謝すると、なおも飯時に取りに来て貰つては困るとか、色々と口喧しく云つた揚句、今日はいかんから明後日頃来てみてくれ、などという家もあつた。一カ月普通三十錢、家族の多いところで五十錢位なのだが、